The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 臨床哲学研究会に参加して考えたこと |
| Author(s) | 小泉, 朝未 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 30-32 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68178 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 臨床哲学研究会に参加して考えたこと

小泉　朝未

当事者研究についての発表ということで、「障害をもつ」ということが多くテーマに上がった。私自身は、芸術活動や、自立生活を送る障害者の介護に参加するなかで、障害をもつとされる人々と関わっているが、研究として彼らを論じることが大抵できない。人間を対象化したくないからではなく、「障害をもつことによって当人が抱える困難さ」の一部は、「障害者を ── 例えば医学的または社会学的に ── 論じる」ことによって生まれると見聞きしたからである。何らかの立場から論じることが、人々を区分し、特定のイメージや言説を作り出す。そのイメージや言説のなかで、自らの身体的・社会的な状態と向き合いながらくるしんだり、戦ったりしているまさに当事者を知っているからである。

研究では特に、どのような立場にもたたずに、実践を他者に向かって表現することは難しい。当事者として、もしくは治療者として、当事者に関わる共同研究者としてなど、立場を表明しなければ、実践の目的や関わり方を伝えられないように思う。そして、研究のなかで、特定の立場にたって問題を論じることへの批判も重要な部分を占めているといえるだろう。今回の研究会でも、そのような様子を発表や質疑応答のなかから伺うことができた。

実践を伝える際に、聞き手の側にうまれる疑問を解消するために、研究会では質問する時間が設けられている。しかし、立場によって発せられた言葉への疑問はなかなか解消せず、理解に至らないこともある。疑問はときには、立場に関わる戸惑いや怒りが含まれる時もある。実践にかかわる人、そしてそれを聞く人のうちで生まれてくる感情や価値の問題を、その場でどのように拾っていけば良いのだろうか。せわしない日常のなかで、立ち止まるために研究し、他

者に向かって発表をする時間はつくられるはずである。しかし、実際には、時間が十分であることはほとんどない。それでは、研究発表以外の場所で、例えば、研究室で、その問題を議論することが、発表だけでは取りこぼすもろもろの事柄を拾うことにつながるのだろうか。

わたしがこの問題にこだわるのは、議論ができない、自分だけで対処しようとする実践に関わる苦しいことは、自分一人では、時が経つにつれて、見ようとしなくなるのではないかという懸念があるからである。それが転化して、実践者が判断を誤ったり、当事者に苦しい思いをさせることになったり、当事者に被らせてしまう害を誰も見ていないからと正当化するようになってしまえば、当事者に危害を加えることや命を奪うことにつながらない可能性は否定できない。実践者が苦しさを聞いてもらえない、もしくは声をかけてもらえないことで、さらに声をだせない人をつくりだしたりすることにはならないだろうか[1]。

声を出せる状況に自らを置くために、哲学対話もしくは臨床哲学研究室というのは有効だろうか。研究室が、本を読み、自分の思考の成果を発表する以上の場となり、忙しい日常からいっとき抜け出して、所属する立場が要求する前提を宙づりにし、人に話を聞いてもらったり、人の話を聞いたりできる場所になるだろうか。研究室が開かれている、その場が存在しているというだけでは意味がないだろう。前提を宙づりにするのにも時間がかかるのだから。対話ということを中心に据え、ひろば臨床哲学（水曜 6 限の講座）のように半年もの時間をかけて、問題を取り上げる機会を作ってきた臨床哲学への期待はそこにある。しかし、わたし自身はそのような場に出席し自分の問題は聞いてもらえただろうか、と問われれば素直に頷くことができない。わたしが問題にはっきりと気づけずに、正面

---

[1] 障害者と介護保険制度により事業化したヘルパーとの関係で、ヘルパー側の暴力や問題行動とそれに抵抗できない重度の障害者と出会い、問題を仲間たちと話す中で、出て来た話題。

から取り上げなかったのが悪いのだろうか。
　臨床哲学の課題に対する焦りは、まさに自分にかかわるものとして迫ってきているが、まだ答えは見つけられていない。

（こいずみあさみ）